

## 庭球部 100 年を支えた「ノーブル・スタボーンズ」

庭球部 山口 章（昭和 46 年卒）

### 1. テニスの歴史とルール

テニスの発祥は紀元前のエジプトであると言われ、その様子を描いた壁画が残されていますが、宗教的な意味を持っていたようです。現在のテニスの原型が誕生したのは 11 ～ 12 世紀、フランスの修道院の回廊で貴族が手のひらや手袋をして球を打ち合い楽しんだのが始まりです。その後フランスのみならずイギリス・ドイツ・イタリアと徐々に王族・貴族の間で流行し、16 世紀には遊戯として定着するようになりました。

1874 年イギリスのウォルター・ウイングフィールド氏がテニスを新しいラケットゲームとして広めようと試み、1877 年にアマチュア選手 22 名による第 1 回ウィンブルドン大会（英国）がロンドンで開催されました。1881 年にはアメリカ国立ローンテニス協会がルールの標準化と競技の組織化を図り、第 1 回全米選手権を開催（男子シングルスのみ）し、1887 年には女子シングルス選手権も始まりました。また、1891 年には全仏オープン、1905 年には全豪オープンが創設され、個人戦の四大選手権大会として毎年開催されています。ところで、この 4 大会のコートの種類がそれぞれ違い、全英は芝生（ボールが滑る・イレギュラーをする）、全仏はクレイ（ボールが遅い・イレギュラーする）、全米・全豪はハード（ボールが早い・イレギュラーしない）となっています。1 年間にこの四大選手権を制覇する（グランドスラム…トランプのコントラクトブリッジで圧勝する言葉）ことは大変難しく、男子シングルスではドン・バッチ（米）が 1938 年、ロッド・レーバー（豪）が 1962 年と 1969 年に、女子シングルスではモーリーン・コノリ（豪）が 1958 年、マーガレット・スミス（豪）が 1970 年、シュテフィ・グラフ（独）が 1988 年に達成しました。男子ダブルスではフランク・セッジマンとケン・マクレガー組（豪）が 1951 年、女子ダブルスではマルチナ・ナブラチロアとパム・シュライバー組（米）が 1984 年に、混合ダブルスではケン・フレッチャーとマーガレット・スミス組（豪）が 1963 年に達成したのみです。また生涯で四大選手権を優勝したキャリア・グランドスラムでも男子シングルス 5 名・女子シングルス 8 名・男子ダブルス 6 組・女子ダブルス 3 組・混合ダブルス 1 組しかいません。日本人でこの四大会で優勝したのは沢松和子・アン清村（米）組が 1976 年に全英女子ダブルスで優勝したのみです。

一方、1900 年にハーバード大学のテニスチームが国別対抗戦を考案し、カップを寄贈したデビス氏の名前からデビスカップ(デ杯)としてスタートし、男子シングルス 4 試合・ダブルス 1 試合で行なわれ、国を挙げて応援されています。1921 年（大正 10 年）に日本は初参加して決勝で米国に 0 - 5 で敗れた以降、決勝戦まで進出できていません。女子については 1963 年にフェデレーションカップ（現在フェドカップ）がスタートしました。

ところでテニスの試合は 3 セットマッチで行なわれ、2 セットを先取した方が勝ちとなります。1 セットは 6 ゲーム先取ですが、5 - 5 になった場合は続けて 2 ゲーム先取した

方がセットをとることになり、6-6になるとベスト 12 ポイントで7 ポイント先取した方がセットを取ります。1 ゲームは4 ポイント先取（15・30・40 で数える）で40-40 になったら、ジュースと称してジュースから2 ポイント先取するまで続けられます。従って、1 試合は1 時間半から2 時間かかり、四大選手権のような大きな大会は5 セットマッチで行われるので1 試合3～5 時間も要します。体力も勝敗を左右します。主なルールはサーブ2 本で、ネットインした場合はやり直しとなります。レシーブする方は1 バウンドでサーブを返した後は双方ともにライン内であれば何処に打っても良いのですが、常に1 バウンドまたはダイレクトに打たなければなりません。2 バウンド（または審判台・フェンスに当たる）となったらその時点でボールデットとなり相手方のポイントとなりますし、打ったボールがバウンドしたときにラインの外でも相手方のポイントとなります。

## 2. 庭球部 100 年の歩み

米田満先生の「関西学院スポーツ史話」によれば1897 年（明治30 年）ごろにH・ウェンライト神学部長が関西学院でテニスを楽しんでおられたそうで、その後徐々に学生の間で広まり、1903 年（明治36 年）にはテニスコートが作られました。寮生の中でテニスが盛ん（当時の道具は全て輸入品で高価であったため、ソフトテニスを中心）になったそうです。ちなみに日本には1878 年（明治11 年）に横浜の外人居留地の人々が自分たちのためにコートを作った（山下公園入口に記念碑がある）のが始まりです。

その後、1912 年（明治45 年）4 月専門学校令による新しい高等部（商科・文科）が設立され、6 月に神学部も包含する関西学院専門学生会が発足し、運動部として庭球会・武芸会・野球会・端艇会の4 部が創設されました。庭球部では創部100 年の間には国別対抗であるデビスカップ戦へ日本代表として多くの先輩が出場し、1947 年（昭和22 年）から始まった全日本大学対抗テニス王座決定戦には8 回優勝し、1922 年（大正12 年）から始まった関西大学リーグ戦では男子は85 回の内47 回優勝しました。1958 年（昭和33 年）には女子部が創設され、近年実力が向上しています。この10 年の戦績を見ても関西リーグ戦では男子は7 回・女子は3 回優勝しています。個人戦では男子は全日本学生選手権大会のシングルスで5 名・ダブルスで5 組の優勝者を出しており、全日本学生室内選手権大会ではダブルスで2 組の優勝者を出しています。

## 3. NOBLE STUBBORNNESS の意味

現在は体育会のモットーになっている NOBLE STUBBORNNESS は元々庭球部のモットーでした。1920 年（大正9 年）宿敵の神戸高商（現神戸大学）に必勝すべく応援団約500 名と共に神戸高商のコートへ出かけました。試合は一進一退を経て大将戦まで行きましたが、無念の敗北で終わりました。敗因は技量ではなく精神的欠陥であると畑歎三先生に指摘され、標語を先生に作ってもらいたいと要請しましたところ、後日先生は「NOBLE STUBBORNNESS…高貴な頑張り」を提案されました。そのスローガンを幅40cm、長さ2m のグリーン看板に白い角ゴシックで書いてコートフェンスに取り付けました。現

在もテニスコートのフェンスに掲げ、それを見ながら日々練習に励んでいます。

「STUBBORNNESS」は粘りや根性と訳されますが、それに「NOBLE」を伴うものでなければならぬと先生は考えられました。NOBLEには高貴な・上品な・気品のあると訳されますが堂々たるとの意味もあり、それはフェアプレーに根ざしたものでなければならぬと先生は強い願いを託されたそうです。庭球部創部100周年に際して100年史を発刊しましたが、その寄稿の中に多くの先輩がNOBLE STUBBORNNESSを胸に秘め、練習して試合に臨んだかを述べています。その精神を大別すれば次の3点に集約できます。

#### ①フェアプレーの精神

テニスでもマナーを大変重要視しており、試合中でも相手選手がスパークショットをした場合にはラケットを手で叩いて相手を賞賛します。また、明らかに審判のミスジャッジと判った場合には選手同士で確認して、ジャッジと違う判定で試合を進めることもあります。

現在、学生の試合はセルフジャッジ（審判なし）の試合が多くありますが、関学の学生はジャッジを誤魔化さないで、試合を見ていると清々しいとの定評を得ています。このように試合では正々堂々と戦うことが基本となっています。

#### ②最後まで諦めない粘り

試合に臨むに際しては、常日頃の練習成果を如何に発揮するかに集中することが重要です。日によって自分の調子が良い時・悪い時色々あります。相手も同様で、実力に差があっても主審がゲームセットと宣言するまでは自分の持っている精神力・技術力・体力の全てを出し切って試合をすべきです。相手のペースに乗らず、練習時の自分を描きながら、矢が尽きるまで戦うことが重要です。日本テニス協会の渡辺康二副会長（甲南大学出身の元デ杯選手）が庭球部の100周年記念式典で「関学のコートで関学の選手と試合する時は一筋縄ではいかなかった。あのNOBLE STUBBORNNESSの看板の下では、どんなにボールを打ち込んでも返してくる粘り強さには平伏した。」と言っておられました。

#### ③弛まぬ努力

常日頃から試合を想定して自分の得意とすることを伸ばし、不得手をカバーする練習をすることは言うに及びません。一流のアスリートは夢に向かって常に一段高い目標を掲げて練習に励んでいます。その目標を達成した時は更に一步高い目標を掲げて努力します。その努力を通して自分の夢を実現させる訳で、自分に厳しく技術・体力・精神力を向上させるべく日々努力し続けることが肝要です。

### 4. 社会人に必要な NOBLE STUBBORNNESS

大学を卒業して社会人になれば、親元から独立して自活しなければなりません。そのためには収入を得るべく仕事をする必要があります。学生時代は好きな事を、好きな時に、好きな者と一緒に出来ますが、社会人になれば常に仕事を最優先にしなければなりません。

自分に不得手な仕事でも全力投球して、その結果について責任を取らなければなりません。担当する仕事を選べないし、常に順風満帆に仕事が出来るとは限りません。想定外のことが起きることは世間の常であります。その様な時には自分の考えをしっかりと持って目標に向かって忍耐強く努力をする以外に解決する方法はありません。結果がどうであろうと

真正面から問題解決に努めることが重要で、そこから新たな道が開かれます。そうすれば自信に繋がり、大きく発展していくと思います。つまり、社会に出ても NOBLE STUBBORNNESS の精神を胸に秘めて地道に努力することが重要です。

## 5. 関学生に求める NOBLE STUBBORNNESS

大学を卒業されるまでに大半の方々には就職活動をされますが、どの企業も面接の時に「学生時代をどのように過ごしたか」を質問されると思います。この質問の趣旨は単に学生時代に勉学以外に注力したことの内容を聞くのではなく、注力したことにより何を知り、何を得たかを聞いております。そしてその内容が社会人として役立つものかどうかを判断しています。

従って、学生時代に何か1つの事、つまり体育会や文化部等の学校のクラブ活動に参加する、または1つのボランティア活動をずっと続ける、アルバイトをして得たお金で海外留学して見聞を広めるなど、自分で目標を定めて努力してもらいたい。学生時代の自由な時間を1つの事に忍耐強く継続し、問題がおきた時には正面から向き合っ解決に努力してもらいたい。また、常に反省してより良い方向に事が運ぶように習慣づけて欲しい。そうすることにより、自分自身を磨き上げることはいずれ社会に出ても自分を支える大きな力になると思います。今からでも遅くはありません。何か目標を定めて邁進して下さい。